
新世紀エヴァンゲリオン

綾波レイは猫耳メイドが似合うと思う。むしろなんでも似合うと思う

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新世紀エヴァンゲリオン

【Nコード】

N0113BA

【作者名】

綾波レイは猫耳メイドが似合うと思う。むしろなんでも似合うと思う

【あらすじ】

使徒と呼ばれる宇宙からの侵略的な存在とネルフという地球防衛軍の戦うアニメだと思われがちだがそれは違う気がする。タイトルと挿絵募集

使徒、襲来（前書き）

作者は文才に乏しいので過度な期待はしないで下さい。

使徒、襲来

手の感触を確かめるかの用に手を握り、開き、また握り、また開く。

『エヴァンゲリオン4号機、リフトオフ!』

背中の中の固定がはずされる。敵との距離およそ2000メートル。

A・T・フィールドの中和完了。一気に終わらせる!

手に持ったパレットライフルを使徒に向けて一斉掃射する。

しばらく撃つているとトリガーを引いても弾が出なくなつた、弾切れか。と思つた瞬間爆煙の中から壊光線が飛び出てくる。辛うじて躲したものの、距離を一気に詰められた上に体制が悪いため次の攻撃は避けられるかわからない。

『伏せて!』

突如巻き起こる小爆発の嵐。使徒のA・T・フィールドを中和しつつ自分の防御に回したため、使徒にA・T・フィールドの発生を許してしまった。

「悪いな綾波」

『集中して。これは実戦よ』

即座に使徒から距離を取りプログナイフを取り出す。駆け出そうと思つたときに使徒の両目が光る。

「ちよまッ!」

瞬時に横に跳躍したため難を逃れた。変わりに山が一つ消し飛んだが……

ダアアアアアンン!となる地響き。倒れる綾波のエヴァ。

「ク、こっからは1人か」

綾波とエヴァ

初号機

はルート192で回収され

た。

すると使徒から離れていく偵察機。

まさか、時間!?

「ちょよ、ちょまッ！」

瞬間、町は暴虐的なまでの光と音に包まれる。

4号機はA・T・フィールドを全開にして衝撃に備えたが、表面が溶けるに至った。

？

わはははは！と高らかに笑う国連軍の指揮官。

「見たかね！！これが我々《・・・》のN2地雷の威力だよ。これで君の新兵器の出番はもう2度とないというわけだ！」

依然表情を崩さないネルフの総司令官、碇ゲンドウ。

「電波障害のため、目標確認まで今しばらくお待ちください」
そのオペレーターの声は若く、年も25前後である。日向マコト、それが彼の名前だ。

「あの爆発だ、ケリは付いている」

作戦室中央に映し出されているレーダー、その一部が突如として付きあがる。苦しくも国連軍の希望は砕け散ったのだ。

「爆心地にエネルギー反応！」

「なんだとッ！？」

「映像、出ます！」

スクリーンに映し出される映像は、鮮明に使徒の健在を捕らえていた。

「おお！」

あたりから起こる驚愕の声。

「我々の切り札が」

「町を一つ犠牲にしたんだぞ！なんてやつだ！」

「化物め！！！」

だん！と机を叩く国連指揮官。振動でタバコの吸殻が皿から一つ落ちる。開いた掌には血のあとが残っていた。

モニターの向こうでは使徒の内から新たな仮面らしきものが生えてきて、傷が恐ろしい速度で癒えている。瞬間、映像が砂嵐と化す。「事故修復機能に、学習能力の増強、か」

「は。わかっております。はい、では失礼いたします」

言い終わると同時、碇ゲンドウは受話器を置きながら椅子から立ち上がると、国連の指令官に向き直る。

「本作戦の指揮権は君に移った。お手並みを拝見させてもらおう。

我々国連軍の所有兵器が目標に対し無効であったことは素直に認めよう。だが碇君！……君なら勝てる、のかね？」

それに対しゲンドウは皮肉をこめているのかわからない目で言う。ご心配なく、と。

「そのためのネルフです」

？

簡単にシャワーを終え、LCLを洗い流したあとまた直ぐプラグスーツに着替えることとなった。勘弁してほしい。まあでも、プラグスーツは以外に便利だからいいか、熱くないし。

とぼやきながら歩いているとまたリッコ博士に捕まるのも面倒なので早く退散しようと思った矢先、

「あら、早かったわね」

「リ、リッコ博士……」

捕まりました。

「またミサトさんですか？」

「そうね、どこをほっつき歩いてるのかしら」

「あはは」

そして流れてエレベーターに乗せられる始末。ほんとに勘弁してくれ。

とおもったら案外早くにエレベーターがつく。チン！となるベルの音。ハア、とため息をつくリッコ博士。

「どこへいくの？二人とも」

そしてぎこちない動きでミサトさんの首がこちらにまわる。

「おそかったわね、葛城一尉」

「あ、リッコ」

「あんまり遅いから迎えに来たわ。人でもなければ時間もないんだから、グズグズしてる暇はないのよ。少しはコダカ君を見習ったらどうなの？」

「ごめ〜ん、と謝るミサトさん。いつもの如くまだ不慣れでさ、と続く。

「で、なんでコダカが一緒なの？」

「さっきそこで会ったのよ。その子ね、例の3人目の適格者^{サイドチルドレン}ってへ〜、コイツが、と3人目^{サイド}を見る。どうも気が合いそうにないな。

流されやすそうだし、気弱そうだし。

「あ……初めまして。碇シンジです」

「あたしは技術一課E計画担当博士、赤城リッコ、こっちがリッコ博士が指してきたので、続きをもらおう。」

「謎^{ケレ}の」

「4番目の」

「チツ！と舌打

「4番目の適格者白雲コダカ^{フォースチルドレン}。よろしく」

「何か途中で舌打が聞こえた気がするけど、気のせいよね？」

「うんうん。気のせいですとも赤木博士」

「ハア、と一つため息をつくリッコ博士。

「いらっしゃいシンジ君。お父さんに会わせる前に見せたいものがあるの」

「と言って指紋認証とカードキーで扉を開けるリッコ博士。」

「見せたいもの、ですか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0113ba/>

新世紀エヴァンゲリオン

2011年12月31日05時46分発行